浜口伸明

産業集積と地域発展

二〇一〇年に大学の仕事で浙江省の義烏市で調査を行ったことがある。世界最大の雑貨卸売市場の評判を聞いて行ってみると、確かにその巨大さには驚かされた。同時に、フロアごとに同種の商品を扱う多数の商店が小さなブースの中で価格や品揃えの嗜好に創意工夫をこらして競う多様性が保たれているところが印象的であった。市場の周辺には国内外のバイヤーが利用する高級ホテルやレストラン、運送業、各国語で交渉の仲介をするサービスなど、市場を取り巻くフロントヤードとバックヤードが完備していた。

改革開放以前の義烏は農業以外これといった産業がない寒村であった。上海からも杭州からも離れた山間の盆地にあり、市を成すには交通上の利点があるわけでもない。特産の砂糖を売り歩く行商人たちが持ち帰った雑貨の闇市の成長に注目した市政府が、施設面の投資を行って大規模な集客を可能にしたことが発展の転機となった。計画経済体制が厳しくとられていた以前の中国では異例であったと思われるが、自由な商業活動を奨励し、外来人の活動にも寛容な、いわば特区のような存在であった。

以前、ハイテクパークとして名高い北京の中関村を調査した際にも同様の印象をもったことがある。北京大学や清華大学など中国を代表する教育研究機関が集まる地域で自然発生したパソコンや部品を扱う商店街を起源として、北京市政府が情報インフラを整え、教員や学生の起業を奨励したのである。

産業集積を造り出すことは可能だろうか。多くの研究者は無から有を生み出すことは難しいと考えている。確かに成功の土壌と独創的な戦略性がない単なる模倣は成功しないだろうが、行政が萌芽を見逃さず、規制を緩和して戦略性をもって取り組んだ結果、国内に類似の存在がなかった義烏市場や中関村は急速な発展を遂げ、国際的に注目される存在にもなった。このことは日本の地方行政にも一定の教訓を与えるだろう。

ただし産業集積の競争優位は永続的ではない。筆者はUAEのドバイで、ここはかつて世界有数の天然真珠採取地だったが、その地位を私の出身地でもある三重県志摩地方の養殖真珠に奪われたと聞いたことがある。真珠産業は廃れたが、ドバイはその後金融・輸送サービスのハブとして新たな発展を遂げた。個別の産業は一つの地域にとどまることはないが、産業のメタモルフォーゼを成功させれば地域の発展は維持される。

サブプライム危機から欧州金融不安につながる国際経済情勢の中で、先進国向けの輸出の低迷に苦しむ中国各地の産業集積は最近不調をきたしていると伝えられている。産業集積は、経済環境が変化しても企業がこれまでの成功パターンを抜け出すことができないという負のロックイン効果もある。そうした状況を克服できるかどうかが、中国経済の成功物語が続くための要因の一つではないだろうか。

はまぐち　のぶあき／神戸大学教授

ペンシルヴェニア大学Ph. D。専門はラテンアメリカ経済と空間経済学。アジア経済研究所研究員、神戸大学経済経営研究所准教授を経て、現職。著書に『ブラジルにおける経済自由化の実証研究』（西島章次と共著）などがある。本文に紹介した義烏の調査は、「世界の雑貨卸売市場―中国義烏市の発展のメカニズム―」（伊藤宗彦と共著、国民経済雑誌2011年11月）にまとめられている。